



ゆづり

マーク制作: 関知磨子(秋津コミュニティ: 蚊帳の海一座)

秋津のホームページ、<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/> から「融合研」をリンク
融合研のトップページは、http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/yugo_index.htm

本号の内容

1 「第4回融合フォーラム2000in市川」の報告詳細

- ・概要
- ・基調講演概要 ・ 分科会記録
- ・アンケート結果
- ・提言資料・実践事例の配布

2 フォーラムの反省会より

- ・フォーラムの持ち方
- ・ミニフォーラムについて
- ・支部・ブロック活動について

3 連絡いろいろ

(1) 会員の融合教育情報

鹿沼市教育委員会発行「鹿沼発 学校をつくる 地域をつくる～学社融合のススメ～」について

- (2) メールアドレスを知らせてください
- (3) 会費の納入は、郵便局の口座で
- (4) 会員名簿(2000年度)ができました。

「第4回融合フォーラム2000in市川」の報告詳細

大好評のうちに、「第4回融合フォーラム2000in市川」が終了しましたので、概要をお知らせします。惜しくも参加できなかった方も、融合研の広がりを感じていただけるものと思います。

なお、パネルディスカッションは記録がまとまり次第送らせていただきます。

基 調 講 演 概 要

「学社融合が切り拓く無限の可能性」

寺脇 研 氏

1 教育改革と学社融合

学社融合には、すべての日本人が入る。学校と社会の中に必ず全員が含まれるのだから。これらが手をつなぎ、融合すれば無限の可能性が広がるのである。そのために学校と教育行政は、厳しいほどに改革していこう。学校以外(家庭・地域)では創造をしていこう。この二つの力が無限の可能性を生む。

今までは学校だけがやっていたので、可能性が限定されていたのは当然である。学校は限られた時間 人員 予算 条件のもとに動いているのだから。学校教育に無限の可能性があるような錯覚があり、何でも背負いすぎていた。そして、問題がおこることになった。

2 教育改革と学社融合の「経過」「展開」「抱える問題」

ホームスクール、フリースクールなど「学校に行かずに学んでいる人についてどう考えるのか。」というテーマの番組への取材引き受けられる文部省になってきている。学校・教育行政は今まで「見せたくない」「説明したくない」部分があったはずなのに、文部省の進展もうかがえる事実だ。

(1) 社会教育の分野にフォローの風

学社融合は社会教育関係者の悲願だったが、社会教育が学校教育に近づきたくても叶わなかった。

今、教育の専門家だけでなく地域の人たちも巻き込んで融け合って融合という展開になってきたために学校は開かれやすくなった。学校は地域の人たちの税金でつくられたものである。

生涯学習がめざすものは、学校機能と社会機能の融合が生み出す大きな力

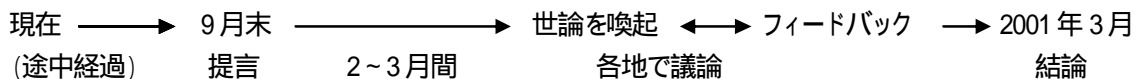
(2) 学校教育と社会教育相互の越権行為

教育の行政以外の分野も含めて、福祉、女性のための行政、労働部、青少年部、農村の生活向上なども、生涯学習行政の中で越権行為ができるようにしよう、縄張りをなくしていこうという考えである。つまり、教育行政分野だけではなく、学校教育法、社会教育法の改正も必要な時期に来ていると言えよう。

(3) 文部省内では

21C型の学社融合の観点に立って、改正を来年にも出せるよう進めている

教育改革国民会議のこれから



提言内容としては

- ・ 学校関係のための法的整備
- ・ コミュニティが管理する学校(コミュニティスクール)
- ・ 現行の形態以外の様々なスタイルの学校の設立システム
私立校設立の規制緩和 人的、物的な面での柔軟性

国民会議:国民が決めるものであるから、提言がでたら真剣に話し合っただけで欲しい。もう「文部省が決める」という時代ではない。

今こそ、みんなが言える機会なんだ。その中でどれくらい許容度を増していくのかが興味深いところ。新しいと思うのは、今までは、今ある形を保つこと、維持すること、例外をどこまで認めるかの論議だった。

国民会議は、今ある学校の形が素晴らしいという前提を一旦くずして見て、一体これからの学校をどうするのかを考えてみようとするところだ。

3 この1年間での文部省からの発信と進展

(1) 通学区域の自由化(文部省が全国に一斉にさせるのではない)

それぞれの自治体の考えで進めていくべき ex 品川区、八代市

きちんと議論すべきなのにしていないのではないか

最終結論を出す時期に来ているはずである

「親は愚かな判断をするにきまつてる」「人気取りの学校へ人が押し寄せる」「受験に有利なところをとる」「楽なもの、好きな先生ばかり選ぶ」からやらない方がいいのだ、ということになっていないだろうか。

納税者(市民)に向けて行政が評価するなどもってのほかである。

品川区の選択が完璧なものかどうかはわからない。だからやっていく中で初めてよい方向が見えてくるはずだ。選ぶ力は選ぶ体験をしないと永遠に身につかない。そうやって選ぶ中賢明な選択とは何かを考えていくのだ。

明治時代の学校の始まりは、通学制度はなかった。今、2万の学校が全国いたるところにできたから柵目で切ったように線引きし「学校が近くにあるから結構ですね」という形になってしまった。そして、それが当たり前になってしまった。

問題提起として板橋区民としての私の意見は「私は自由化したほうがいい」ということだ。

選択が自由化した中で、通学可能な学校を選択する。その選択の理想的なスタイルは通学区域は自由だ。町内には3つあるけど、よっぽどの例外を除いて、みんな近くの学校に来たというスタイルである。

どこに行ってもいいよ でも近くの学校が安心だよ 見に行ってみた きちんと情報公開と説明責任がある。 多少の問題はあるらしいが、保護者が力をあわせて進めば良いことだ。近いんだからわざわざ遠くに行かなくてここでいい。

言いたいことが言え、聞きたいことが聞ける学校。情報公開と説明責任なくして学社融合などなされない。学校ばかりで自由化なんかしても効果はあがらない。

今、公立学校の信頼がなくなっていないところでやれば効果的。東京では、公立学校の信頼がなくなり、起死回生で信頼を取り戻すべく取り組んだがリスクではある。秋津などは良い例。不登校がゼロとのこと。地域全体が学校とつながっている。子供の居場所がある。

(2) 学校評議員制度

取り入れている学校は、現在2割くらいであり、健全な数字であろう。それは、文部省にはおいても、おかなくても、どちらでもよいという姿勢があるから。

評議員としては、その学校及び地域が良くなることを考えている人、そのために自発的に汗をかき意志のある人、そして個人の話でなく地域全体のことを考えて意見を言うことができる人であること。

理想の評議員会制度

究極の目標は、地域住民全員が学校評議員になれるような地域づくりである。

だが一方ではPTA 組織も成立しない地域もあるくらいだから、そんな人物が存在しないのも無理なし。

4 社会の進展

NPO を中心とする様々な活動が出てきた。その一つとして「PCA」

PTA に対する PCA

PTA は子どもが学校を卒業したらやりたくてもやれないボランティア組織だった。

そこで、子どもが卒業したあとも学校や地域で活動したい人々も組織に組み入れようというものである。

NPO は多様化してきた。しかし、行政として一つずつの NPO 判定をする筋合いのものではない。住民の中だけで解決できないことがあったら調整するが、本来は市民同士で正しく判断していくものである。「空理空論」ととらえられることも多い。たしかにすべての大人にそれができるとは思わないが、市民の内の1~2割の大人の力があれば、すべての人間の総力でなくても物事は動く。

たとえば、地域コミュニティは「作るもの」であり「ある」ものではない。「地域コミュニティ」なんて「ない」ということはあり得ず、それは「作らない」ということなのだ。

(教育改革国民会議・金子さんの話から)

PTA 活動が形骸化(官僚化)した理由

PTA は 50 年前、「参加は自由だが全員が参加したい」だったはずだが「この学校に入ったら必ず入るもの。終わったらもうやめるんだ」

あらゆる組織はほっておけば官僚化する宿命をもっている。気をつけなければならない。

だから、強制でなく、みんなのできるようにしていくにはどうすればいいのか

参加義務はない 我が子のことだけ考える人に入ってもらっては困る この地域のすべての子どもを良くするための活動という主旨である。地域の子全体がよくなれば自分の子どもだってよくなる 主旨に賛同する方は入ってほしい 入りたくて入った。だから好きでやっている。

という考えがよいと思う。

一時は会員が減るかもしれない、が、そのために活動が低調になることはないだろう。

PTA のポイント 「好きだからやっている」という意識の上で活動すること。

義務でやってるうちはまともらない。ボランティア活動でやれば、互いの活動量について考える必要はない。
やれる人は気づかいなくどんどんやれる。やれないからと言ってせめられない。
先生方にも考えてほしい。

「忙しい」「こどもの数も多い」と言われるが、でも仕事好きなんですよ。好きだったら、興味をもっていたら、
もっと子どもたちと接して話すチャンスをつくれるんじゃないかと思っている。

融合をするために、秋津を性急にまねようとするとう無理が生じる。まずおとなと子どもが興味をもちあうこと。
行政の「強制」ではなく「阻害していたことを一つ一つはずし」ていくこと。行政が情報公開、説明責任を果たすよう改めていくことが必要。

学校の施設を国民が使用する権利

今まで、学校は行政の財産として土日は管理不可のため、閉鎖していた。使い方として

A 管理経費を税金で負担する覚悟をきめる。使用料を払う。

B 自治運営システムをつくる。

Ex 鹿児島県 自治公民館の運営 1700人の村に13個の公民館がある。鍵は住民が。

コミュニティがつけられていけば従来から可能なことであった。

だから、行政財産を十分に使わせたがらない役所も努力を！ そして地域コミュニティづくりを！

中央教育審議会 「少子化と教育」という報告書(文部時報6月号で特集記事)

「地域社会で子どもたちを見ていくという視点」がない限り、少子化をただ憂えていることはできない。では、
地域社会がどう子どもたちと接していくのか、ということが大切なところ。学校と家庭だけで育つ子どもは
親にとっても不安。子どもも寂しい。コミュニティで子どもを見守るべきである。そのコミュニティとは
重層構造的なコミュニティの力(町内会だけがそれではない)のことである。

会社コミュニティ、企業コミュニティ、職場コミュニティ、同じ趣味、近いところにいるなど、今一人の人間
が複数のコミュニティに属していることが当たり前。

同僚の子育てに、属している企業の皆がカバーしていけるようになる力を大切に考えている。誰かの命
令だからするのではない。していくのではない。

会社でさえできるのだから「近所の人どうし」という地域の方がもっと可能。

5 教育改革への批判

「総合的な学習など、子どもはみんな学力が下がるのではないか」

「文部省に任せたら、みんなわけがわからなくなる」など、今まで関心がなかった人、文部省任せだった人まで心配している。

その声に対して、いくら説明しても説得力がない。説得できるのは、生き生きとしている子どもの姿だけ。子どもの目の輝きをたくさん見てもらおう。とくに、小学校の先生、頑張る。

大学生の目が輝くのはちょっと難関、12年くらいかかる。「ここがヘンだよ日本人」という番組(日本の大学生の学力について)では、

日本人の大学生 「別に」「興味がないから勉強できない」「興味を持たせるようなことを大人たちはなにもしてくれなかった。」

外国人の大学生 「人のせいにするな」

しかし、これを見て胸が痛む。

50人全員が今まで興味の持てる学習を受けてこなかったと言い張るのか。

「興味」を抜きにして教えた結果がこうなんだと反省。興味をもったら目が輝く。小学校の輝いた子どもの目を見て欲しい。学社融合の場面での子どもたちの目を見てほしい。学校ではこ

れからそこに努めていくつもりだ。

だが学校だけではできない。家庭や地域の理解が必要。興味を持ち始めた子どもたちが、土日に家で行動を起こす。それを学社融合で手伝ってほしい。法律で「融合しろ」とは言えないので不安ではあるが家庭や地域で理解して手伝ってもらって初めて可能となる。

この4月そういった意味でのバッシングは最高潮に達していた。国民の方向性が「ゆとり」か「学力」かでゆらいでいたが5月に17歳の「バスジャック事件」「殺してみたかっただけの殺人

事件」などが起きてしまい、「ゆとり」の教育の必要性が再認識された形になった。他人と同じに、他人より速くと言われ続けて窮屈になっていたのでは？やはり「ゆとり」は大切なのかというようにバッシングは沈静化してきたところではある。既に学校現場でも新しい指導要領に変わっているのに今逆戻りなどしたら大混乱になってしまう。文部省ではなく、熱心に新しい教育や学社融合に取り組み始めた個々の先生方や地域の方に、バッシングが波及し支障が出たりしないか心配でもある。

ここで「学力」とは何かをそれぞれの立場できちんと考えてほしい。8割の方が無関心なだけ。話を良く聞けばその人たちが、詰め込みでやってくれとは言わないはずである。

2000年には考えて欲しい。

学校がどうなるかではなく、社会がどうなるか

そして、子ども達がどうなるかでなく、大人が社会をどうしていくかを！ 50年間、先送り先送りされてきたことだった。

今年こそ、総決算していきたい。

融合研のネットワークが、ねずみ算式に広がっていくことを期待する

6 地方行政の壁

一番の壁 教育行政だろう

教育委員会は悪者の集まりではない

教育委員会を育てるのも住民の存在

教育委員会は教育委員合議体の事務局である

だから教育委員会は門前払いできる立場にない。

昔40年前の教育委員会は、市民の意見に対して「やってみただけだめでしたね」という形

今は、「前にやってみただけどうやってもだめだったから今度もだめでしょう」という形

そのうち、市民もあきらめて何も言わなくなった。そこで「前例」と「よそ」をもとに教育委員会がすべてを決めるようになった。「前例」は調べられるが、「よそ」のことは文部省に聞く。すると「大半のところどうやってます」と大半に伝えられ「ほとんどそうしている」「その方がよい」に変わってしまう。この50年の教育行政の形。

それで今回 転輸機のように180度変えていこうとしている。

文部省は多様な資料の提供

教育委員会も「文部省」に相談するのではなく「住民」に相談していく

文部省も地方自治体に相談する形もあると思う

50人の東南アジアの学生(高校生)を 農業・工業高校(高度な環境)に受け入れてくれる自治体があるだろうか。

ホームステイで、2ヶ月から1年。

コミュニティで、NPOでもよいのでは。役所がやらないほうがいいのでは。

社会教育行政のやり方を学校教育行政全体に取り入れていかねばならない時代になった。税金で給料をもらっていると言う自覚のない者もまだいる。市民の声を聞き入れていけばスムーズな行政ができるだろう。

これからは、地方教育行政(市町村)が主役。もう、文部省主役の時代は終わった

だから、もう一回教育委員会に近寄って声がけしてみよう。あきらめずに。

官民融合も。

分科会議事録

A分科会 「『合校』構想(学働遊合)と学社融合の接点」

提言者: (社)経済同友会 太田篤氏 コーディネーター: 秋津コミュニティ 種田祝次氏

1946年発足の企業経営者個人が参加する(社財)経済同友会は、一般に知られていないが30年以上前から教育に関する政策委員会を設立していた。最近では、1988年の「新しい個の育成」を始め、1999年の「企業の採用と学校教育に関するアンケート調査」まで約2～3年間隔で定期的に提言を発信してきた。それぞれは時代を背景に多岐に亘って各界に影響を与えている。

その中で融合研のテーマに深く関わる「学校から『合校』」(1995年)、「『学働遊合』のすすめ」等の具体的な発信がなされてきた。(詳細は資料参照)それらのテーマは採用活動等で教育機関へ与えてきた弊害の「反省」を踏まえ現場を見据えたもので、分科会参加者も評価していた。

質疑応答では、「発想力」「格差是正」「画一教育・個性重視」「基礎教育・選別生」などテーマが取り上げられた。太田氏の回答は、事例を挙げながらケースに応じた幅広の観点があるという内容が多かった。

日本を代表する経済団体の一つである経済同友会の会員が豊富なスキルを携え実際の教壇に立ち手腕を発揮する一方、経営者自身も肩書きが通用しない子どもたちと対峙するなど意欲的な教育への継続的な提言・提言を今後とも期待したい。

B分科会 学社融合教育のプログラムづくり

提言者: 栃木県鹿沼市教育委員会 越田幸洋氏 コーディネーター: 宮城県築館町立玉沢小学校 野澤令照氏

全国に広がりを見せている学社融合教育の事例検討を、先進地である鹿沼市の具体例をたたき台にどこでも出来る「学社融合」での教育改革のプログラムづくりをしましょう

鹿沼市における定義

- ・学社融合には狭義と広義のものがある。鹿沼市の実践は狭義の学社融合である
- ・学の部分の定義付けを特に狭くしている。
- ・学校教育の授業の部分と社会教育・地域活動の融合を意味している
- ・授業そのものを充実させていかなければならない、というのがその理由である
- ・授業が変わると子供が変わる。子供が変わると先生が変わる
- ・ゆとり教育はまず先生から。5分の1の労力で授業の充実が可能になる ゆとりによって子供たちとの接点が増える
- ・学校(先生)の負担を増やすだけでは、授業の充実が進まない
- ・授業の中でどう融合させるか
 - ・地域の考え、願いなどを把握することで、プログラムづくりに生かせる
 - ・つまり、地域にあるプログラムを授業の中に持ってくる事が出来る
 - ・保護者、地域人材の参画(参加ではない)必然である
 - ・融合の実践により、地域人材が着実に育っていく
 - ・中学生の図書館ボランティア養成(カリブージュニア養成講座) 中学生が小学生に対する図書指導を行うことにより自分たちが自然に読書に親しむことにつながった
- ・双方(学校と地域社会)の狙いを同時に達成できるのが学社融合
- ・1 + 1 = 4になる。相乗効果が出るのが学社融合

最近の鹿沼の動き

- ・ 3年間(8～10年度)は研究校として2つの学校のみ取り組み
- ・ 研究期間が過ぎて、さらに充実させていきたいという学校の熱意があった
- ・ 3年目を過ぎてから、不登校児はゼロになった 学校が楽しくなった
- ・ 先生たちが連れてくるのではなく、地域の人が連れてくるようになった
- ・ 音楽支援活動: 休み時間のミニコンサートの開催と音楽の授業の連携(年間12回)
- ・ 発表の場の提供(地域のメリット)場所と観客を学校が提供する
- ・ そのお礼は音楽の授業の指導をしてもらうこと
- ・ 休み時間なので、子供たちの自由参加
- ・ 子供たちは、5年間で60回の生演奏に触れることが出来た
- ・ 14年夏までのプログラムが出来てしまった
- ・ 子供たちの鑑賞の態度が抜群に良くなった
- ・ 地域の人が、他の学校に売り込んだ 2校が名乗りをあげた
- ・ 他の地域まで出向いて行って、学校の世話をする地域のコーディネーターの存在が重要
- ・ 賛同者が3人出来ると、具体的に動き出すことができる
- ・ PTA(有志)として学社融合を実践しようとする動きが出てきた

子供が提案した学社融合

- ・ 聴覚障害者の絵手紙展が5月に開催された
- ・ それを見に来た子供たちが絵手紙展を自分たちの中学校で開催したいと希望した
- ・ それに合わせて、美術の時間に絵手紙を教えて欲しい(絵手紙サークル「和」)
- ・ 子供たちが美術の先生を説得

総合的な学習の時間について

- ・ NPO がボランティアに対する教育プログラムを提案
- ・ 環境系 NPO が環境教育プログラムを提案
- ・ 消費生活センターが消費生活展を総合的な学習のプログラムとして提供
- ・ 消費生活センターは消費に関する教育をやってほしいという願いを持っている
- ・ 小さいうちからローン地獄などに対する教育を行う必要がある
- ・ 地域の住民や組織が自然に自発的にプログラムを提供してくれるようになってきた

板荷ふるさとオペレッタ2000

- ・ 子供たちが地域のお年寄りから聞き取り調査した戦争体験をもとに、台本作成に参加
- ・ 社会教育だけでは時間の問題などがあり、学校教育と組み合わせることにより深みが出てくる
- ・ 子供たちが作曲までおこなった(パソコンを使って)
- ・ 自主性、想像力、表現力、世代間交流、(子供たちだけで作るのではなく大人と一緒に作る)

会場との意見交換(参加者による学社融合の実践事例)

- ・ 親子のサークル活動の実践(調布の事例)
多摩川でバードウォッチング、野草を取って食べる、農家の休耕田を無償で借り、農作業体験、収穫、納豆づくり
20数家族、90人くらいの参加 活動は主に土日
授業とは分離した形で進めているが学校教育とからませられるともっと別の広がりや深みが出てくるのではないかと
- ・ 新潟における事例
6月7月の休校日を利用して校庭でキャンプファイヤー、火おこし体験
父親の参加が多い、父親同士の交流

プログラムづくりは子供たちに任せていきたい

・ 仙台の事例

高齢者が高齢者にパソコンを教える教室を開催

高齢者を情報弱者にしない

パソコンを学んだ高齢者が学校教育野のなかのパソコン教育を实践

教えるときに大事なこと:授業の中で課題をひとつ完結させる(はがきづくり)

親にはがきを出させる、それを見た母親が自分も習いたいと言い出した

落伍者を出さないためのサポート体制

先生たちもこれほどのサポートは出来ない

高齢者も社会とのかかわりを持つ中で、生きがいを持つようになった

・ 大阪の事例

伝統芸能を中心とした活動

盆踊り たくさんの子供、保護者の参加

町づくりへの参加意識

家庭にある古い道具を通じて古い文化を学ぶ

・ 武蔵野市の事例

3つの中学校のパソコン教室の事例:学校施設の開放

PTA が主催したパソコン教室の開催

パソコン部の顧問の先生と生徒が先生になって保護者や高齢者に対するパソコン教室を企画した

子供が教える立場になる:人に教えることの楽しさを学べた

異世代間の交流ができた

・ 府中の事例

道徳授業を地域の人とやっていく

学校教育としては、地域の人たちの専門性に感動している

講師の方にも充実感がある

講師も次の人を呼んでくるようになり、自主的にプログラムづくりが始まった

読書ボランティアも盛んになってきた

コーディネーター心得

自分のために相手と結びついていくことが長続きする秘訣

お互いガードが固い:相手が何を欲しているかニーズの分析が必要

お互いのメリットを分析する

C分科会 『地域で進める子供外国語学習』

提言者:NPO認可法人 教育支援協会 吉田博彦氏 コーディネーター:千葉大学教育学部 竹内裕一氏

吉田氏よりこれまでの活動概要について説明あり(詳細は別紙資料参照)

本日の主要テーマは「民間が地域にどう関わっていけるか」にある。つまり、外国語学習のために「地域でどこまで進められるか」について具体的な実践例として形に残すことが最重要と考えている。現在は生みの苦しみと考え、会員が借金をして活動資金に充てている。将来的には、地域自らが予算立案をして、国から委嘱金が降りられるようにすることを目標としている。小学校英語のスタートは、文部省から画一的な指導要領が出されるよりも、地域が自主的に進めていくやり方のほうが好ましいと考えている。そして最終的には、プログラムは日本人が作成すべきで、外国人の講師を登用する場合でも、あくまでも協力者として参画してもらうのが良いと考えている。教育委員会は簡単には動かせないが、人間関係がうまくいくようになると、事は前進し出す。運営方針は「学識経験者を入れない」「学校の先生に協力してもらう」の2点にある。

現場から「市及び教育委員会と意見が合わず、もう降りたい」という意見が出されるが、今は実績を作り出すことを最大の目標とし、なんとしても学社融合を推進させることで意見が一致する。

〔参考〕C分科会の議事内容

出席者: 15名

必読資料: NPOによる学社融合の実践報告(平成12年7月24日)

議事内容(発言者、略)

- ・本日のテーマは、「外国語学習のあり方」そのものより「如何に地域ですすめるか」という点にある
- ・現在の事業は「文部省生涯学習振興課」を受けてのものである
- ・2002年度以降の学校教育には、地域の人材活用が必要になる
- ・全国の中から協力してもらえそうな自治体を探し、ねばり強く話し合い現在に至っている
- ・活動方針として以下の3点に重点を置いている
 - 学識経験者を入れていない(教育は語るものでなく実践するものだから)
 - 学校教師に協力してもらう(何と言っても先生が参加されないと今後うまくいかないから)
 - 様々な国籍の外国人を登用している
- ・問題点は、まだ国からは依嘱金は降りていず、現在は協会会員の自己負担で運営していることにある
- ・現在の活動は、本来は地域単独でやりたかったが、教育委員会からの指導で「市」としてやるように言われた。実際の運営全ては「秋津コミュニティ」でやっているのに、市と意見が対立する場面が多すぎる。お金も降りないと言うのなら、現在の事業から降りたいというのが正直な気持ちである
- ・初めてのことで、教育委員会とも話しが合わないこともある。早く実質的なことに入りたいのだが、教育委員会が体面を気にしているところがあり、なかなか実質的なところへは進まない。
- ・降りないでもらいたい。何としてもこの事業は成功させないと、現在、国が進めている学校改革に反対者する者たちの格好の批判材料となってしまう恐れがある
- ・外務省は法人格が無くても助成制度がある。文部省も勉強すべきではないか。
- ・教育を名目にお金を降ろそうとするのは、文部省の今回の事業が初めてのことで
- ・何としても財源の確保を目指していくつもりだ
- ・そのためには、予算立案をして勝ち取る方法を確立できるよう努力している
 - ・自分は教育委員会の人間であるが、教育委員会は講師を探してきて事業をすれば終わりということが多い。コーディネーターでしかない面がある。計画から反省まで市民と一緒に進めて、自立して歩める体制にしていかなければならないのではないか。
 - ・現在全国で展開されているところの探し方はこうだった。「理念を持っている市長」を徹底的に探して、訪ね歩いて説得して回ったに他ならない
- ・教育に関して社会的に危機感がある今が「学社融合」のチャンスだと思っている
 - ・来年からの省庁再編では、NPO法人はどこが所轄庁になるのだろうか？
- ・さきほど自腹をきっての活動という発言があったが、日本の銀行はこういった事業に全く無関心だから貸してくれない。シティバンクは積極的に貸してくれるはずだ
 - ・確かにいろいろな考えや方法論はあると思うが、みなさんに考えていただきたいことは「とにかく実績を今作っておかなければ何も変わらない」ということだ

- ・現在のカリキュラムは日本人が作ったもの。これからもそうあるべきだ。外国人はあくまでも協力者としての立場、というのが大切と考えている
- ・そして、現状の問題点を見直すことにより、さらによりよいものにしていきたいと考えている
 - ・学社という言葉の意味を今日初めて知った
- ・地域が変わらないと小学校英語はうまくいかないと考えているので、学社融合で是非成功させてもらいたい
 - ・学習指導要領は今後どうなるのだろうか？
 - ・変えたいという気持ちはあっても、恐らくできないでしょう
 - ・外国語は文法から入ると恐らく失敗するだろう
 - ・内容および方法は学校に任せてもいいのではないかと考えている
- ・ちなみに広島で行った活動では、アンケートに答えてくれた全員がこの活動の存続を希望している
- ・地域と学校とがより密接に係わり合って進めていく現在の活動の必要性を改めて痛感した

D分科会 「市川市コミュニティ施策と学社融合」

提言者：市川市教育委員会 押田敏郎氏 コーディネーター：筑波大学教授 八代勉氏

各々自己紹介の後、市川で行っている2つのコミュニティ施策について、前半でコミュニティスクールの紹介、後半でナーチャリング・コミュニティ施策の報告を行った。

コミュニティスクールでは、大戦後コミュニティ活動が入ってきたが、風土の違いから馴染めなかった。市川では、昭和55年から独自にコミュニティスクール活動をはじめた。スタートできた背景には、「地域と一緒にやらなければならない」という気運が高かった。また「学校が荒れた時代」地域が関わって立ち直らせた事例が大きかったのではないだろうか。

総合的学習など様々な取り組み事例紹介の後、「学びの本質の理解」として「学校」は子供だけが学ぶ場ではなく、子供も先生も、地域の人々も学ぶ場であり、人的・機能的に「開く」ことが大切であると結んだ。

また、ナーチャリングコミュニティは平成9年より「地域で子供を育てよう」という考え方でスタートし、市内中学校の16ブロックでボランティア実行委員が運営を行っている。

ビデオを使った事例紹介もあり、具体的な施策の説明がなされた後、市内の現職校長先生より事例報告や「事業評価を誰がどう行っているのか」など突っ込んだ質問もなされた。

最後に学社融合の呼び名も無い頃からの市川市の取り組みは、皆さんの地域でもいろいろな形で生かされるであろうし、改めて考える機会にもなったのではないだろうか。

参加者のアンケートから(回収 54枚)

アンケートを提出してくれた人が例年になく多く、今後への期待が感じられます。また個人名を記入してくれた人が多く、意見に主体的であることもよくわかりました。内容はできる限り記載し、会報での紹介や会員以外の参加者には礼状とともに送ることとします。また特別なものには、個人宛での所感等に対応しています。

本会は、情報交換を通じた交流をも目的としているので、会報には了解をとって個人名を載せることを原則としています。しかし当然のことですが、アンケートの性格上ここでは全員無記名で掲載します。内容について共感したり、情報交換をしたいという場合は、事務局までご連絡ください。

会長所感

持ち方の面(日時・場所・人選・方法)では、大筋では「よかった」という歓迎の評価が多かったが、パネルディスカッションに対しては、特に会場の意見をどう吸い上げるかは今後の検討課題である。

内容の面(何を目的として・どのように迫るか)では、どのよう目線の高さ(レベル)で取り組んだフォーラムであったかということ、参加者の実践事例に対してのものが目に付いた。事務局レベルでは、どう受け入れるかというようなハード面を準備の中心にしてしまったため、一番肝心の「何を明らかにするためのフォーラムか」ということ

の練り上げが少なかったことが露呈した。昨年までの「事例交換をするフォーラム」とは、役割が違ってきていることに対する認識が甘かった。
 会員はもちろんのこと会員以外からも期待が大きく、また次回の参加希望も多く、今後の活動のあり方について十分な検討をする必要がある。
 初めて取り組んだ懇親会は、交流の場としての役割を十分果たせたようで評判がよかった。しかし、アンケートには無かったが、折角の時間をじっくりと情報交換する場とするために今後の課題もあると感じる。
 経済界や多方面の方々の提言と参加を多くの人が歓迎している。一方、地域で地道に活動している実践家の発表と情報交換は会の生命線である。その兼ね合いをどうするかは今後の課題である。
 理論と方法で実践の積み上げのある市川市からの提案は、参加者に多くの示唆を与え、市川で開催した意義が証明された。
 Eメールやホームページなどを通して、日常的な情報交換を望む声が増えている。条件整備が急がれるところである。現在のところ、
 ホームページは、[秋津のホームページ](http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/)、<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/>から「融合研」をリンクする。
[融合研のトップページ](http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/yugo_index.htm)は、http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/yugo_index.htm
 ここには、掲示板もあるので、自由に意見を書き込んで情報交換ができるようにした。
 県単位やブロックに分かれた研修会の開催希望があった。近隣地域での研修会や支部の設立など、小回りのきく活動も考慮したい。
 多様な活動が実践されてくるにつれ、行政や団体等との折衝が必要になることが想定される。したがって各種の行
 政法や教育法についての研修も必要になってくる。そういう点からの指摘があったが、ありがたいことである。

1 あなたは、このフォーラムについて何で知りましたか。

- (18) 会報
 (5) 新聞や雑誌の案内(それは、)
 (32) その他()
 複数回答 1

・会員は、もちろん会報からであるが、会員以外の方が多く参加されたことがわかる。それらの方は、雑誌等よりも個人的に紹介を受けて参加した人が多い。

2 このフォーラムは、何がよかったですか。(いくつでも)

- (42) 講演
 (41) 分科会
 (24) パネルディスカッション
 (24) 夜の会員発表・懇親会

3 このフォーラムに対するご意見・ご希望(順不同)

内容は変えず、文は常体を原則としました。個人名は略します。

・初めての参加だが、参加者の多さ・プログラムの内容・講師陣の多様さに驚いた。今後も全国的な広がりを持つと良い。できることがあれば手伝いたい

。地元の指導主事にも広めたい。

・参加者からも意見を聞ける機会があってもよい。

・パネルでフロアからの提案を切ったのは、事前にアナウンスがなかったので残念。文部省のキャリア組に言いたいことが、フロアに渦巻いていたのではないだろうか。フロアの生の声を役人にぶつけられなかったのは、文部省を呼んだ意義が半減。

・パネルは、終了後も質疑の時間があるとよかったと思う。それぞれに問題意識を持っている人の集まりなので、参加型の要素も考えていったらよい。

・来年度も参加したい。

・中央の各界代表者の意見を聞くことができたのは貴重な体験であった。目からうろこが取れた思いがした。

・とくに企業からの提言がよかった。

・参加しやすい日程であった。皆さん元気があって楽しい。

・もう少し事例を聞きたかった。

・元気が出ます。子どものため、子どもを取り巻く大人たちのために、こんなにも熱心に取り組み、語り合う方々がたくさんおられることに涙が出そうです。みんながそれぞれに幸せ生きがいを求めていくために学ばねばなりません。運営も手作りのあたたかさがあったです。細かな意見は、みなさんの熱意の裏返しです。

・よりよい内容と融合研の仲間たちと意見を交わしあえてたいへんよかった。

・準備から本当にお疲れさまでした。

・多様なバックグラウンドをもつ人々がこのように集まってともに考えていくことは、とても貴重だと思います。分科会・懇親会で参加者同士の相互交流があったように、パネルディスカッションでもフロアからの意見交換の場があってもよ

- かったと思います。時間の関係等でむずかしかったのでしょうか。
- ・分科会は良いのですが、いくつにも出たいのに残念です。報告書を楽しみにしています。
 - ・4分科会のそれぞれの基本テーマを紹介し、説明して分科会に入った方がよかったのではないかと。分科会の実践に基づいた議論はたいへん楽しかった。
 - ・今回が4回目ということであるが、もっと早く知りたかった。融合の事例発表を多く聞くことができ、大変参考になった。ただ融合がほとんど進んでないところから来たためか、融合の最初のステップをどう踏んだらよいのかわからずにいる。その事例に至るまでの過程をもっと詳しく知りたい。
 - ・今回のような大きな大会のほか、昨年のようなミニフォーラムの実施の継続をお願いしたい。
 - ・宣伝方法をもっと広く行ってほしい。各学校・自治体とか。
 - ・これだけのメンバーを集めての研究会は全国的にも珍しいと思う。今後ますますの充実を期待する。
 - ・人と人との出会いがすばらしかったです。皆様の生き生きとした姿に元気ができました。パネルディスカッションでは、質問も受けてほしかった。
 - ・とても参考になった。今後、学校の事例(とくに計画と評価・参画)をたくさん聞きたい。また融合のための学校側の働きかけ方を知りたいです。
 - ・質問の時間がほしかった。
 - ・2日間でやる内容としては、十分である。各界の第一人者を迎えての本会に出席できて感謝している。資料として、可能であれば全国各地の会員等を通して種々の事例をいただきたい。
 - ・講演は、面白かった。資料配布の時間をもう少しとっていただきたい。パネルは、会場の質問も受けていただきたい。
 - ・今後のテーマだが、参会者の意見を聞く場の設定。
 - ・「学校関係者」「地域」「行政」等、それぞれの立場での事例や悩み等、実際に活動している現場の声を聞きたかった。市川市の事例は、とても感心した。
 - ・フォーラムの組み立て・目の置き所はよいが、進行と内容が薄い。中身をもっと核心にふれるものに限った方がよい。
 - ・全日参加できず残念。土・日開催だとよかった。
 - ・パネルで「教育とコスト」の問題について、太田さん・松山さんの意見が聞きたかった。
 - ・ハード面では、制度や組織などについて、詳細な説明を聞くことができ大変勉強になった。ソフト面では、ボランティアをどうやって育てていくかという「人」の部分がエアポケットに入ってしまった結局ここが大切なのに。子どもたちが接するのは、制度・組織ではなく人なのですが。
 - ・学社融合ということについて深く考えたことがなかったので、非常に参考になった。具体的体験に裏付けられた意見が多く、説得力があった。
 - ・パネルディスカッションは休憩時間に質問票を出させて、その中からいくつか取り上げて後半で討議する例もある。
 - ・JCYや経済同友会の方が加わった割には、学校教育(学)に視点を据えた話が多すぎた気がする。地域活動(社)の一環として学校をどう位置付けるかという議論ももう少し欲しかった。懇親会以外に参加者も発言・討議できる場があればさらによかった。
 - ・たいへん面白かった。しかしなお、学校に関わる職員(事務・用務など)の関わりが少ないことが残念。教育に関わる多様な職の人々が、本来であれば地域との関わりの中で新しい役割を創りだせるのではないかと思います。
 - ・大変充実したフォーラムであった。分科会については、学社融合にとつての具体的な課題を(解決を要する)精選して議論を深めていくともっといいのではないのでしょうか(一人の提案ではなく、複数の提案者をたてて)。
 - ・寺脇さんの話はいつも刺激的。東南アジアとの交流もできたらいいなあと思います。
 - ・大変勉強になった。初めての参加だが、是非次回も参加したい。
 - ・初めての参加だが、共感することが多かった。
 - ・夏休みにこのようなフォーラムが開かれると、「勉強してみよう。」という気になる。
 - ・連携というレベルなら本校でもしているようだ。融合へということで学習していきたい。教師との会で紹介してみたい。
 - ・講演は、PTAのあり方・評議員・学区自由化について聞いてよかった。
 - ・初めての参加ですが、講演はとても考えさせられた。人にやらせようことに期待して待ってはいけなさと感じています。自分は、なかなか足が前へ出て行かないので、どうかこのフォーラムをアピールして波を大きくして行ってください。
 - ・一日目のみの参加だったが、とても有意義な機会であった。講演は期待通りだった。分科会Aは、同友会の説明と資料は、もちろん良かったが、質疑応答・フロアからの意見発表がとても面白かった。このような機会を準備・企画された融合研の皆様に感謝します。鹿沼にも足を運びたい。
 - ・B分科会に参加。学社融合を進める上で、押さえるべき大事なポイントを感じることができた。具体的事例の提示で学社融合を進めていく上でのイメージづくりができた。
 - ・市川市の実践を聞いて、教師として親として力が湧いてきた。楽しみながら学校にできることを探していきたい。
 - ・初めての参加。大きな刺激を受けた。
 - ・何としても、続けることに意味がある。パネルは、焦点がぼけたので、もっと焦点を絞って議論したどうか。
 - ・実践報告も多様であり、講師等も多彩でたいへん有意義なものだった。実践発表ないしは紙上報告等にも参加し積極的に活動していきたいという願いを持った。来年のフォーラムも是非参加したい。

4 学校と地域の融合教育研究会に対して(順不同)

(1) 関心がない 他に無記入 3

(50) 関心がある

それはどんなことですか。

- ・今日的課題について研究している点。
- ・多くの人と情報交換できるから。
- ・体育的活動・行事について事例を聞くことができた。
- ・デンマークのフリースクールが日本で定着できないものかと考えている。学校へ行かない権利もあり、子どもたちはフリースクールで学んでいる。教育を根本から見直す必要があるし、実践の一步にしていきたい。
- ・今、学校で悩んでいることそのものなので。
- ・教員なので、教員側から地域をどう利用できるかということ。
- ・現実の問題として、学校と地域の融合は簡単なことではない。それを実践したり、実践に向かって努力したりしている方々のことが分かり刺激が多い。
- ・全国の動向と取り組みの視点を知る機会となる。人的ネットワークの場になる。
- ・B分科会の鹿沼市の取り組みに、たいへん興味をもちました。
- ・学校と地域の「融合」ではなく、「融合教育」とあえてしているのはなぜか。
- ・会報等の情報を楽しみにしている。
- ・学校および子育てを核にしての地域創造
- ・これからの教育行政の一つの柱となるのが学社融合であると感じている。
- ・実際に学習を取り組んでいくことで、必要感を強めている。子どもの様子、参加する、参画する保護者や地域の方々の反応より。
- ・現場(学校)の生の声が聞きたい。融合を困難にしている点。閉鎖的にならざるをえない実状など。
- ・自発的な組織である点。
- ・会報を楽しみにしている。組織のみんなで読んで知る。ファックスやインターネットを使い、具体的なプログラムや情報・計画書等を気軽に情報交換できたらうれしい。全国で、とても自発的ががんばっている方々が多く、ビックリやら感心。そしてたくさんエネルギーをいただいた。
- ・融合教育はすべて中央から始められるものではない。地域からの盛り上がりでないと根付かない。
- ・いろいろな面で地域の可能性を具現している点。学校を楽しくすれば、こんなにも大人も子どもも生き生きするんだと思った。
- ・ボランティア活動を継続的に進めていく源となるエネルギーに敬意を表する。とともに、その元となるsomething(子どもの幸せを祈る気持ち?)に関心がある。
- ・学校教育だけでは限界にきている。
- ・地域で行われる様々なこと、起きている様々なこと、生きている様々なことをリアルな現実として子どもたちに感じてほしい。そのために、融合研にいろいろな事例を進めてほしいと思う。
- ・教育行政職員として何ができるか考える(学ぶ)場として今後も参加していきたい。
- ・地域づくり・まちづくりが今後極めて重要なわが国の課題。しかし、多くの国民はその必要性を感じていない(欠乏感がない)。いかにしてそのところを気づかせていくか。
- ・正直、全く知らなかったが、これまでの実践例を拝見するにつけても興味を持った。
- ・学校は地域社会に対してもっともっと開かれた存在になるべきだと従来から感じていた。
- ・本市には、全中学校区に地域会議があり私はPTA会長なので保護者委員として参加している。それとの関わりを見つけない。意見表明から行動に移すプロセスを模索している。学校教育にも生かしたい。
- ・自分の子どもが学校に通っていて、親と学校・地域がそれぞれとても距離をもってしまい、それぞれがのせいと批判しあっている現状を目の当たりにして、これでは問題が何ら解決されないと感じているため、お互いに理解しあい協力して子どもを育てていける環境を作りたいと思っている。
- ・研究の内容
- ・学校側の壁をどのように最初に開いていけばよいか。実践事例を多く学びたい。生涯学習センターとして学校側にどのように呼びかけていくべきか思案中。
- ・自分の教師としての成長。地域を知り地域へ貢献できる姿勢を実感できる。21世紀は学校・家庭・地域が力を出し合い、「合校」として子どもを育てる時代だと思うから。
- ・学校教育・社会教育の活性化と生涯学習社会の実現について。
- ・今後の日本の教育創造において最大なことだと思う。

5 学校と地域の融合教育研究会に対するご意見・ご希望(順不同)

- ・前の4と同じような設問なので、アンケートをもう少し考えて欲しい。
- ・「開かれた」研究会であって欲しいです。退席者を出したのは、見ていてさびしかった。
- ・様々な問題提起や意見を聞き、これからの活動に力をつけてもらった。一泊したことも交流を深めることになり良かった。毎年参加したい。
- ・おもしろい会だ。それは各分野の方々が参加していて「融合」しているからだ。
- ・様々な立場の方々が意見を出し合える場として素晴らしい会だ。

- ・素晴らしい企画に感謝。
- ・また刺激してほしい。
- ・地元での活動について全力的に取り組むと同時にネットワークを組んでいけたらいいと思う。
- ・Eメールでもっといろいろな方と話していきたい。
- ・全国各地で「学校と地域の融合教育」が進んでいることはとてもうれしい。なんのための融合なのか、改めて自問自答することが必要になってきているのではないかと思う。融合とは直接関係ないかもしれないが、「総合的な学習の時間」が強調されているだけに逆に「教科」の役割を改めて考え、「豊かな教科授業」をしていきたいと思っている。
- ・限られた県のみのようなので、多くの県の状況や事例が聞けるようになるとうれしい。自分も「実践です」と言えるようなものがあるよう努力したい。
- ・今後、各地の情報提供をお願いしたい。
- ・機会があったら、積極的に参加したいと思う。本校の取り組みは、今後も大切なことであると強く実感できた。
- ・自分のいる地域・職場でやれることをやっていきたいと思う。研究会が続いていって欲しい。
- ・全国の会員の実践事例をたくさん載せていただけたらうれしい。地域性があるため、県単位・ブロックに分かれた研修会の開催ができたらもっと充実した研究になると思う。
- ・行政法・教育法についてのエリアがちょっと弱いのではないかという気がする。これは、基本的な戦術を作るときにもそして、もっと大きな戦略を立てるときにも必要なことだと思うので、考えたらかがか。
- ・教育現場の諸君(特に管理職)を巻き込むような活動の展開を期待します。活動を是非アピールして欲しい。私自身も現場に投げかけていきたい。
- ・すばらしい研究団体だ。研究成果をもっと多くの人々に。そのためには、もっと多くのメンバーが資料を持ち寄れるようにしたいです。
- ・インターネットでホームページを探したが、見つからなかった。できればURLを教えてください。
- ・とくに中学校では手をつけづらい所先進的に取り組まれている実践例はとても影響を受ける。
- ・これからも情報提供をよろしく。
- ・会報を送って欲しい。(会員希望MLも)
- ・夜の懇親会を通じて人脈づくりに大きな成果があった。年一回のフォーラムだけでなく、会員それぞれの実践成果発表の場や相互の交流物また各地区での(たとえば東海3県など)会員交流・情報交換の方向性が必要だと思います。その意味で掲示板の設置は大歓迎です。
- ・日程の許す限り参加し実践の方向性を先進校から学びたい。

6 その他(どんなことでも)

- ・自分の地域でも広めたいと考えている。
- ・来年度も参加したい。
- ・全体として、楽しく活気のある会です。
- ・寺脇さんの講演はいつ聞いてもわかりやすく、内容も良かった。新しい書籍にめぐり合える貴重な機会であり、たくさんの人々と「出会い」が一番良かった。充実した2日間で関係者に感謝。
- ・研修案内の「タイトル」を見て参加。いわゆる連携はたくさんやっているのに前に進まないのが悩んでいたが、先進的な考えで実践している「秋津」の見学を通して、前が開けてきた。仲間を連れて見学したいし、来年もこの会にも参加したい。また私は寺脇研氏のファンです。「AERA」で氏の詳しい人柄を知り、ますます講演を聴きたいと思っています。
- ・現在所属するPTAの活性化を進めるための情報を得たい。また学校そのものの学区のあり方・問題についても調べている。
- ・運営が手際よく行われていた。
- ・楽しい2日間であった。
- ・普段、学校行政に対する疑問を多々感じており、また地域に活気をとも思っていたので、いくつかの先進的な事例やビデオを見て勇気付けられた。パネルでの会場からの質問が無いことは、残念だった。次回は考慮して欲しい。
- ・今年、教職を退職する。この会で学習したことを地域で生かしていきたいと考えている。会の益々の発展と充実を祈念する。本当に多くのことを学ばせていただき感謝。
- ・フォーラムの会場からの意見は進行上必ずしも取り上げなくても良いもの。当初にその旨を知らせた上で進行すればよい。
- ・パネルは会場の声も入れて欲しい。
- ・参加してよかった。次回も是非参加したい。わが地域でも開催させていただけるようがんばりたい。セリ市はとても楽しかった。次回はお土産をもって参加したいので、ぜひ次回もセリ市を開催して欲しい。会場は分かりやすかった。宿泊がシングルだったので、気遣いも無く泊まれてよかった。食をともにすると親睦を深められます。みなさん勉強しているんだなあと感じ、反省。次回はうちの行政や学校関係者も参加させたい。インターネットフォーラムなんていうのも面白いかな。
- ・上級に進むにつれて学力格差が大きくなるが、格差の開いた生徒を同じ教室に入れた授業はどのレベルを基準にするのか問題。各科目ごとに学力差教室を作ればと思う。理解できない授業ほどつまらないものはないという経験がある。差別と言う非難があるかもしれないが、「みんな同じ」よりはよいと思う。
- ・太田さんがパネルで言っておられた学校備品・施設の開放については、太田さんが言われた通りです。管理上の問題の前にもっと根本的なコスト感覚が必要だと思う。そもそも学校教育のためにだけパソコンを購入していること自

- 体がおかしい。なぜ最初から地域全体が学び場としてパソコン教室を整備しないのか。非常にギモンを持つ。
- ・フォーラムとは別に研修合宿なんかがあってもいいね。
 - ・秋津小の先生方や習志野市の職員の参加がないのはやっぱり問題ではないか。
 - ・いろいろと学びたいことがたくさんある。これからもよろしく。
 - ・自分の発想の転換や新しいことへのプログラム作り等、刺激を受けることがたくさんある。
 - ・一冊の資料に事例をまとめた(掲載した)ものがあつたら他の分科会の様子も分かっているのだが。
 - ・パネルディスカッションにパネラーとして校長の参加が必要なのではなかったか。学校現場の責任者不在の論議に多少不満でもあり、ポイントのずれを感じた場面があり、個人的にはやや残念。
 - ・熱い思いを持った方々が全国にいらっしゃることを大変心強く思った。パネルディスカッションは、余りシナリオをきちんとしないで、多少自由度を持たせておいた方が、ビビッドになると思います。余りきちっと規定してしまうと、予め用意した原稿内容の紹介に終わってしまい、活発なものとならないのが常です。

融合フォーラムin市川で配布された資料リスト～順不同～ (事務局保管分)

- 1 「潮の子キャンプ」への取り組み 新潟県市振小学校 和泉裕一
- 2 「学校を開く たくましく共に生きる学びのコミュニティ創造 ～学校参加・学校参画・学校ボランティア」
新潟県小千谷小学校 金子幸子
- 3 「楽しくゆっくとふれあい流に 北校区ふれあいルーム利用案内」 大阪府貝塚北小学校 油谷雅次
- 4 「高校におけるボランティア活動の意義」 福岡県 徳永恵美子
- 5 「学校の枠組論 現行の枠組内での実践 地域住民としての実践」 山口県 西川敏之
- 6 「スクールパートナージョイント 嘱託社会教育主事研究協議会との共同企画による市民センター事業」
仙台市教育委員会(佐藤悦雄)
- 7 「インターネットを活用した環境教育の実践」 宮城県玉沢小 野澤令照
- 8 「教育に関するアンケート結果報告」 (財)経済広報センター
- 9 「食と農をベースにした生涯学習事例および地域の食農活動と結びついた学校教育の実践事例調査についての協力のお願い」
(社)農文協
- 10 「出版ダイジェスト」 (社)農文協
- 11 「みんなでなろう地域の先生」 (社)日本青年会議所
- 12 「教育を地域に取り戻すために 15の提言」 自治労自治研
- 13 「学校ボランティア」 新潟県上越市立大手町小
- 14 「人材バンクを活用して」 明石市立二見西小
- 15 「バリアフリーシアタージャパン」 高島琴美
- 16 「地域ですすめる子ども外国語学習 2000年度」 NPO教育支援協会
- 17 「地域との協働による学校づくり いま、学校がかかわるとき」 神奈川県教育委員会
- 18 「全国ボランティア情報提供・相談窓口事業」 エック国立婦人教育会館
- 19 「子ども放送局」 国立オリンピック記念青少年総合センター調査連絡課
- 20 「第12回全国生涯学習フェスティバル 開催のご案内」 文部省
- 21 「子どもインターンシップ」 文部省
- 22 「高校生のインターンシップ」 文部省
- 23 「余裕教室の転用」 文部省・厚生省
- 24 「新しい学習指導要領で学校は変わります。」 文部省
- 25 「スタート 学校評議員」 文部省
- 26 「秋津菌コーナー」 秋津コミュニティ(岸裕司)

どの事例も、具体的で非常に参考になるものばかりです。会員および会員以外でも上記の資料を必要とする方は事務局までご連絡ください。1500円(送料こみ)でお分けします。

「第4回融合フォーラム2000in市川」の反省会より

9月4日に「融合フォーラム2000in市川」の反省会が、みなさんからのアンケートも参考にしながら行われました。そして「今後のフォーラム開催に向けて」と「融合研の今後の活用の充実を目指して」とどのような取り組みをしていったらよいかを熱心に討議しました。その内容とアンケート集計をお知らせします。

最初に宮崎会長から提案があり、それを基に討議しました。印のところは、提案に対する参事委員の意見です。

1 総括(別添「アンケートから」参照)

- ・アンケートおよび多くの声によると、たいへん好評であった。
- ・今後、いくつかの問題点を分析して、次回以降がより良いものになるようにしたい。
- ・理論と方法で実践の積み上げのある市川市からの提案は、参加者に多くの示唆を与え市川で開催した意義が証明された。

イベント的に走ってないか。もっと草の根的に地に足をつけて組織として全国に種を蒔いていくことに力を注ぐべきではないか

フォーラムとしての位置付けがハッキリしていない。勉強会なのか、融合を広めるためのいわば布教の役割も持つイベントなのか。二兎を追うとどっちつかずになる。

二兎を追わざるを得ないのではないか。布教としての役割もある。要は、組織としてどう動くかを明確にすることである。

開催の情報が行き渡ってない。雑誌の研究会案内は、開催月の1ヶ月前ぐらいに発行になる号に掲載することが一般的。もっと、工夫したい。

2 問題点

パネルディスカッションに対しては、特に会場の意見をどう吸い上げるかは今後の検討課題である。

一番肝心の「何を明らかにするためのフォーラムか」ということの練り上げが少なかった。

初めて取り組んだ懇親会は、交流の場としての役割を十分果たせたようで評判がよかった。しかし、アンケートには無かったが、折角の時間をじっくりと情報交換する場とするために今後の課題もあると感じる。

経済界や多方面の方々の提言と参加を多くの人が歓迎している。一方、地域で地道に活動している実践家の発表と情報交換は会の生命線である。その兼ね合いをどうするか。

Eメールやホームページなどを通して、日常的な情報交換を望む声が増えている。条件整備が急がれるところである。現在のところ、

ホームページは、[秋津のホームページ](http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/)、<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/>から「融合研」をリンクする。

融合研のトップページは、http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/yugo_index.htm

ここには、掲示板もあるので、自由に意見を書き込んで情報交換ができるようにした。

県単位やブロックに分かれた研修会の開催希望があった。近隣地域での研修会や支部の設立など、小回りのきく活動も考慮したい。

多様な活動が実践されてくるにつれ、行政や団体等との折衝が必要になることが想定される。したがって各種の行政法や教育法についての研修も必要になってくる。そういう点からの指摘があったが、ありがたいことである。

(委員より)

- ・講演者やパネラーの選定は、テーマの内容と共に慎重に行うこと。
- ・謝礼は、依頼時に伝えて接待係が行う。会長・副会長の方がよくないか。
- ・講演者やパネラーの当日資料を揃えて渡す役を決めて行う。
- ・分科会希望欄を設け、事前に希望をとる。意味は？ 当日に講演終了後に簡単に「何を」提言するかをPRする時間が必要ではないか。人数にバラツキがあってもよい。「分科会希望は当日とります。」と連絡すればよい。極端に少ないようなら、事務局員が回る。
- ・配布資料は、申込者が必要部数持ち込む。事務局では講師・分科会・パネラー分のみ印刷するようにする。
- ・速報の体制(原稿のワープロ化・印刷)を確立する。だれに依頼するか。どう利用するか。速報の意味は？ 常に印刷まで可能な場所がとれるか。記録は、速報のほかに作成するのか。等の意見もあるが。文字数、キーワード、形式などが決めてあれば難しいことではない。
- ・融合研の広がりを見ると、マンパワー的に辛いところも出てきているのではないか。作業の連携が場当たりので、

個人の思い付き頼りでは限界があった。個人的にも組織的にもプラン段階で、参加できる窓口を広げた方がよい。遠路遙々来ていただいた方や会員の基本的欲求を満たすには不安。役員の層を広げたり、会費を値上げしてでも事務局員を雇う等をして、融合の火を枯らさない努力をする時期に来ているのではないか。会を支えるシステム的なところと本来使うべき実務の部分を確認したらよい。その際、協力を申し出てくれる人が単なるお手伝いにならないようにしないと、力の発揮どころがなく、消えていくことがあるので組織の中での役割をはっきりさせて存在感があるようにしないとけない。

3 今後の検討課題・提案

(1) フォーラムの今後

- ・実行委員会方式をとり、その開催地に全権を委任する。実行委員会に事務局を作る。融合研事務局との役割の線引きをする。
- ・内容(何を明らかにするためのフォーラムなの)について、事前の詰め・研修をする。
- ・部会ごとに責任制を敷き、各部会の長と実行委員長に本部役員をプラスして打ち合わせ会をもつ。(開催地での部会例、「事務局(会計・会場折衝・資料・会員連絡等)」、「研修部会(理論研究や明らかにするテーマについて統一見解を出す)」、「宿泊・懇親会部会」、「渉外部会(講師との連絡・講演演題・パネルの持ち方・分科会提言内容等)」)
- ・会場は、ホテルがよい。無理がきく。
- ・講師の到着遅れに対しては、全体の流れの時間帯は変えず休憩時間の短縮等で対応する。
- ・準備会の決定が担当の意思で変更するときは、会長の承諾の後に担当個々が責任を持って対応する(人の交渉や内容説明等)。
- ・日程は、一泊二日がよい。(金～土、土～日のいずれがよいか検討)
- ・一冊の冊子で資料をまとめるのは無理。(締め切り時間、形式の統一、経費等)
- ・宣伝方法の検討。雑誌社は、前月に掲載。(会員外は口コミ、一本釣りでの参加が多い)
- ・セリ市は、内容・値段を検討し継続したい。
細部での問題点がいくつか出ているので、今回の反省・総括のもと、次回以降への原則的なマニュアルを作りたい。一気にマニュアル化するより、もう1～2年は手さぐりのでもいいのではないか。合理化したほうが良いものはすぐにでもマニュアルがあった方が省力化になってよい。プランを考えあうところはマニュアルにしばられないようにすべきである。フォーラムではいろいろな人の出入りがあったが、盗難事件等がなくてよかった。しかし、きちんと役割は決めておいた方がよい。資料が数多くホテルに届いたが、どの場面で使うのか分かりづらかった。箱に「提言用」「事例発表用」とか明記して送ってもらうようにするとよい。ホテルは、宿泊者が多いと貸切が可能であり無理もきく。青年会議所(JC)としては、今回初めて一緒に行動したが、参考になることが多かった。今後も情報交換を頻繁に行いたい。いずれにしろ、事務局サイドの力点のかけ方が会の推進につながるの、省力化は大きな課題です。

(2) 融合研としての今後の課題

- ・地域でのミニフォーラム開催を推進する。
本来、ミニフォーラムの開催は地方で行うことを前提としていた。是非とも地方に呼びかけてこちらから出向けるような形で開催するようにしたい。今、候補地もいくつかある。また、その中から全体のフォーラムが開催できる地域が出てくるとよい。
- ・合宿で研修会をする。
- ・インターネットの活用で、掲示板での情報交換を密にする。またインターネットフォーラムなども志向していく。
- ・情報の発信をどうするか。どう融合の必要性に気づかせていくか。
- ・理論の研修・研究の場をどう常設するか。
本音ベースで話したり悩みが出せるには、少人数の方がよい。本当の実践につながる小規模の会は必要である。勉強会をしているいろいろな考え方を吸収したい。
フォーラムの反省会だけで終わることなく、今後も定期的に「融合研の今後」や「勉強会」としての集まりを持ちたい。

この意見を踏まえて、今後2ヶ月に一度くらいの会を持つことが決定しました。次回は

11月1日(水)19時から21時 場所 市川市役所3階第一会議室

内容は、事務局の体制づくり ミニフォーラム・合宿研修会について 第5回フォーラム(鹿沼大会)に向けて 融合教育プログラム開発委員会(仮称)の学習会について その他

ご都合がつく方は、どなたでも参加できますのでおいでください。(参加できる方は、事務局へご連絡を)

会員の融合教育情報

鹿沼市教育委員会発行「鹿沼発 学校をつくる 地域をつくる～学社融合のススメ～」について

標記の本が、越田幸洋会員が所属する栃木県鹿沼市教育委員会編で発行されました。(草土文化、1700円+税)
鹿沼市の実践は、全国的に高く評価されているのはご存知のところと思います。

内容は、山本恒夫筑波大学教授(本会会員)や浅井経子淑徳短期大学教授の特別寄稿のほか、具体的実践例が次の6章に幅広い視点からふんだんに網羅されていて、必ずや参考になるものと思います。

- 第1章 『学社融合』ってなに？
- 第2章 子どもに生きる力を育む『学社融合』
- 第3章 学校教育に充実とスリム化をもたらす『学社融合』
- 第4章 地域に豊かな学びをもたらす『学社融合』
- 第5章 総合的な学習の時間は学校と地域の協働で
- 第6章 『学社融合』の進め方

どうぞ、一冊、手元にいかがでしょうか。(発行、「草土文化」TEL03-3204-4811)

メールのアドレスを知らせてください

Eメールやホームページなどを通して、日常的な情報交換を望む声が増えています。メールをお持ちでない方に不便をお掛けしないように努力はしていますが、メールでの発信の方が早くお手元に届くこととなります。メールをお持ちで、まだアドレスを連絡いただけていない方は、事務局までお知らせください。

一方、事務局としましては、メール会員には11号からの会報を郵送ではなくメールで送るようにしました。これで印刷・製本そして発送という手順を少しでも省力化できる上に、郵送費の節約にもなりましたが、「やはり会報は印刷されたものが欲しい。」という声もあり、この号(12号)からは全員に郵送することにしました。

インターネット関連では、現在のところ、

ホームページは、[秋津のホームページ](http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/)、<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/>から「融合研」をリンクする。

融合研のトップページは、http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/yugo_index.htm

ここには、掲示板もあるので、自由に意見を書き込んで情報交換ができるようにしました。どうぞ、大いにご利用いただきたいと思います。

会費は郵便局へ振り込んでください

これまで千葉銀行と郵便局とに融合研の口座を開設していましたが、どうも千葉銀行の方がうまく入金できないことがあるようでご迷惑をお掛けしているようです。原因を調べていますがはっきりしません。そこで申し訳ございませんが、

これからは、会費等は**郵便局へ**振り込んでいただきたいと思います。よろしく願います。

(記号)10500 (番号)42592921 宮崎稔 (住所)285-0843佐倉市中志津7-17-4融合研

会員名簿(2000年度版)ができました

2000年度版の会員名簿です。情報交換にもご利用ください。

記載に誤りや変更がある場合は、事務局までご連絡ください。

メールをお持ちになられた方で、記載もれの場合やアドレスが違っている方、変更の方は、メールでお願いします。